道産サクラ 平和の縁結ぶ

阿部さん著書 日本語版に

七飯の浅利さんら３人の人生描く

戦後80年

渡島管内七飯町のサクラ研究家浅利政俊さん(94)ら平和を訴え続ける3人の人生を描くノンフィクションが刊行された。著者は英国在住のジャーナリスト阿部菜穂子さん(67)。英語で発表し、反響を呼んだ自著の日本語版で「戦争は二度としてはいけないというメッセージを伝えたい」と語る。

「アウシュヴィッツの聖人を追いかけて―ある被爆者と桜守の物語」(岩波書店)。「聖人」はナチスの強制収容所で他人の身代わりとなり処刑されたポーランド人司祭・コルベ神父を指す。

コルベ神父と、戦争の贖罪(しょくざい)と友好のため海外に道産サクラの苗を贈り続けている浅利さん、コルベ神父の研究家で、長崎の被爆体験を語り続ける修道士小崎登明さん（2021年に93歳で死去）の3人の人生が道産サクラを軸に交錯する。

執筆は、阿部さんが英国人桜守を追った前著を通し、浅利さんの活動を知ったのがきっかけ。浅利さんは30年以上前、ポーランドのコルベ神父ゆかりの修道院2カ所に道産サクラの苗木計420本を贈呈。阿部さんの取材で、このうち3本を確認でき、さらに小崎さんへつながっていった。

コルベ神父は1930年（昭和5年）から6年間、長崎で布教活動に従事。本書はこの長崎時代に紙幅を割く。修道院創設の苦労や、真夏でも修道服を脱ぐことを許さないなど、厳格な姿勢が批判を受けた話…。神父の聖人ではなく、人間らしい側面も伝わる。

阿部さんは元毎日新聞記者で、2001年からロンドンで暮らす。今回は複雑に入り組んだ歴史に音を上げかけたこともあったが、「この時代を生きた人たちの言葉を残さねばという使命感」で書き上げた。「苦しむのは戦争を始めた人ではなく一般の市民。3人の思いが多くの人に伝われば」と願う。四六判、372ページ。3740円。（能正明）

「アウシュヴィッツの聖人を追いかけて―ある被爆者と桜守の物語」を手にする阿部菜穂子さん

(C) 北海道新聞社　無断転載、複製および頒布は禁止します。